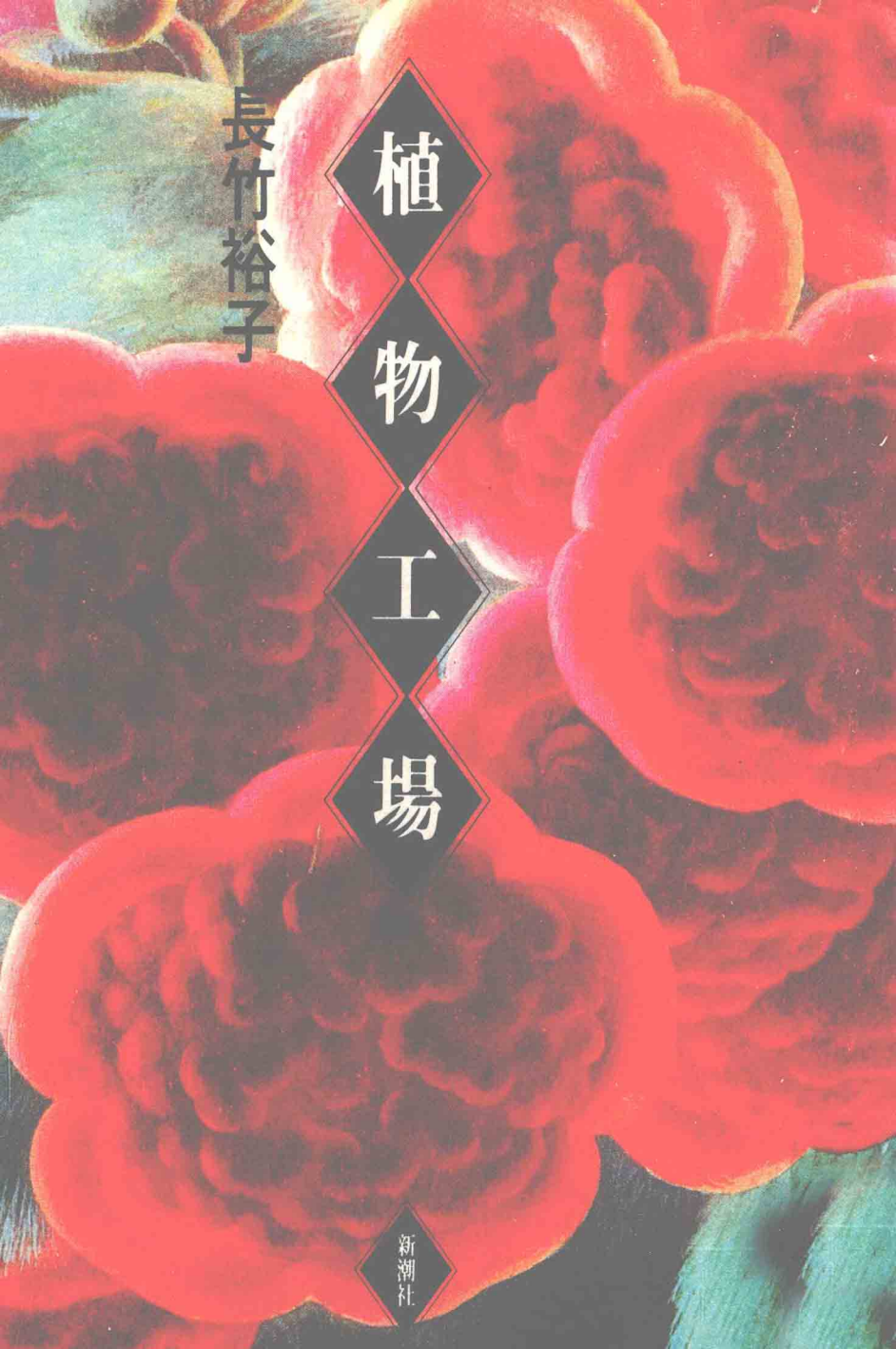




長竹裕子

植

物

工

場

新潮社

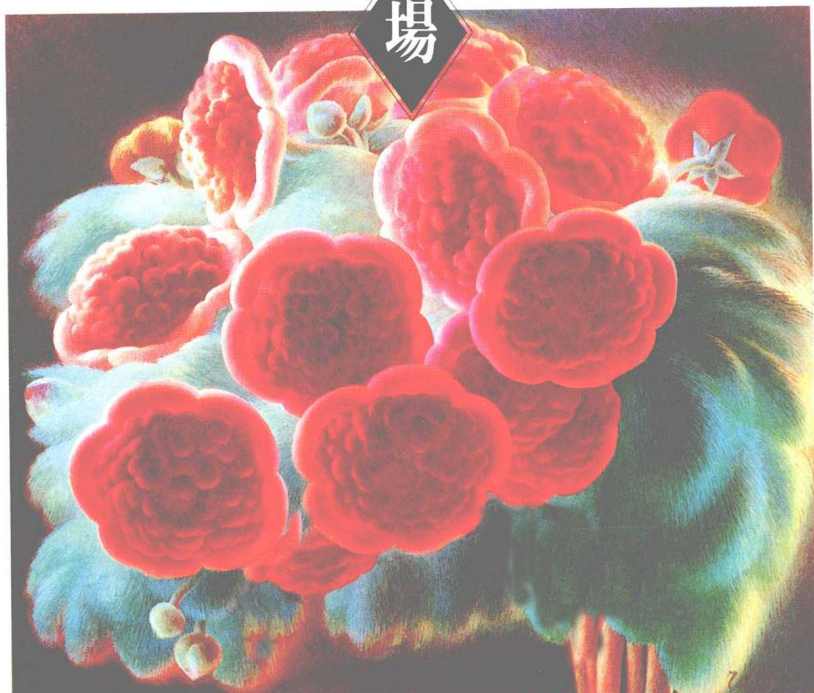
長竹裕子

植

物

工

場



新潮社

ISBN4-10-375801-5 C0093

©Hiroko Nagatake 1990, Printed in Japan

植物工場

しよくぶつこうじよう

一九九〇年四月一〇日印刷
一九九〇年四月一五日発行

著者 長竹裕子
ながたけひろこ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一―
編集部(03)二六六―五四―

郵便番号一六二

振替東京四―八〇八

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛
お送り下さい。送料小社負担にてお取替えい
たします。

目次

フランススの末裔……………5

ヴェロニカの微笑……………53

闇に棲む魚……………111

植物工場……………161

装画 奥山民枝
〔燁〕一九八三

植物工場

フランスの末裔

一

勤めをやめたいと思い始めたのと、ものを書きたいと感じ始めたのと、どちらが先に自分の胸のうちに起こったのか渉は自分でもよくわからない。ふたつのことの間には、どちらかをとらねばならないという緊迫した関係などなかったというのが真相に近いかもしれない。通信社に就職がきまった時から感じていた、わずかにのどもとにひっかかるようなものが半年たち、八ヵ月ほどが過ぎるうちにしだいに重苦しく嵩を増してきて、研修を受けながらも、自分の居るところはここではないと思いつづけていた。自分の中に透명한コップがあると渉は思った。そこに水滴がぼとりぼとりと落ち、ゆっくり水位が上がってくるのを黙って待っている。コップの縁に盛りあがった水が、十ヵ月を過ぎる頃ついにあふれて、渉はごく自然に会社を辞めた。

一身上の都合により云々と型どおりの文句を連ねた辞表を出した翌日、同じ会社へ、同じ

大学から入った男から電話があった。親しくしようとはまったく思っていなかったので涉はその男に特に何も言わずにいたのだ。しかし彼の方では一種の仲間意識を涉に対して持っていたらしく、受話器から聞こえてくる声には、裏切られたとも言いたげな腹立たしさと、当惑がこもっていた。

「転職するつもりなのか」

と彼はたずねた。いや、と短く答えると、じゃどうするんだよ、と悲鳴に近い声があがった。涉はうんざりした。ほっとしてくれ、と言いたかったが、涉には礼儀正しさと気の弱さが表と裏のようになっていいる部分があつてぐっと黙ってしまった。

「書く時間が欲しいのか」

とさらに聞かれた。彼は学内新聞の懸賞小説の一席に、涉の書いたものが選ばれたことがあるのを覚えていたらしい。めんどくさくなつて、涉がまあな、と答えると、いい気なもんだよな、オクサンはなんて言ってるんだ、と嘲笑を含んだ嘆息が伝わってきた。涉は卒業と同時に結婚していたのだ。

「章子は章子で仕事を持っているし、別に何も言っていないぜ」

それはほんとうのことだった。涉は辞める前に妻の章子と話し合いらしきものはしたが、その時章子はふうん、という表情でうなずいているだけだった。涉の返事を聞いて、男はへええ、と笑い出した。けれど涉は章子の態度がごくあたりまえのものだと思っていた。章子

も、古文書館の助手として勤め始めたばかりだったが、彼女が仕事をやめたいとか、変えたとか言い出したとしても、渉は自分もやはりふうん、とうなずくだけだろうと思うのだ。そういったことはひとりひとりのことで、ふたりのことではないのだから。

「お前、オクサンに食わせてもらうつもりかあ」

と男はまだ笑っていた。そんなふうに考えたことはなかったな、と素直に答えてから、渉ははっと、自分の今のことが、男の揶揄を怒気をはらんではねつけたものとして彼に伝わっただろうことに気がついた。相手は急に鼻白んで、あわてたような早口で何か言うとう電話を切った。

その後半年ほどして、男が渉を評して、変わった奴だぜ、会社辞めたのもわかるよ、と言っているという噂を耳にした。渉は男がそう言うのも納得できる気がして、少しおかしく、少し淋しかった。

渉は勤めをやめたからと言って、勤勉に原稿用紙の枡目をうめることに精を出すタイプではなかった。急にありあまるほど与えられた時間にとまどうこともなく、渉は気ままに本を読み、眠りたいだけ眠り、時にはぼんやり何もせずじ時間過ごして飽きることがなかった。それはどことなく、長い病気のあとの回復期に似ていた。彼はふたたび自分の中に透明なコップを思い浮かべた。書きたいと思う気持ちやゆっくりと水位を増して、コップの縁を越える時、自分の作品の最初の一語が自然に生まれるだろうという気がするのだ。

何も約束のない、時間に節目のまったくない生活にふとたよりなさを感じ始めたのはどれほど経ってからだったろうか。そのたよりなさの中に、わずかな後悔に似たものがまじっていなかったと言ったら嘘になっただろう。時にそれが耐えがたいまでになると、渉はあわててさかだちをした。いつこの奇妙な気分転換の方法を思いついたのか忘れてしまったが、何につけてくるおいしい心持ちでいる時に、さかだちをしないと不思議に鎮静の効果があるのだ。窓の外に逆転した家並と空とを見ていると、胸の裡に暗く泡立つものが静まってくる。それでもどうしても駄目な時は、アパートの部屋を飛び出して走った。髪をなびかせ、腕を振り、アスファルトの道に足裏をうちつけるようにしてしゃにむに走ると、不安と憂鬱はうしろへ飛んでいった。

いつのまにか二キロほどのジョギング・コースめいたものもできて、折り返し点の花屋で小母さんに水を一杯飲ませてもらうのが日課のようになった。が、冬近くなったある日、この小母さんに、来年の春こそはがんばりなさいよう、と背中をたたかれて渉はおや、と思つた。うかうかしていると妹さんと同学年になっちゃうわよ、と走り始めた後ろ姿を陽気に激励されて、ますます首をひねってしまった。

その夜、仕事から帰って来た章子と、パズルでも解くようにああでもない、こうでもないと考えて、渉はどうやら来春の大学受験にむけて準備中の浪人生に誤解されているらしいという結論に落ち着いた。

「その小母さんは、わたしたちがふたりで歩いているところをどこかで見て、わたしをあなたの妹だと思ったのよ」

と章子はけらけら笑った。

渉はすぐには笑えなかった。夫婦そろって子供にまちがわれるというのは、なにか自分たちに決定的に足りないものがあるからではないかと、胸の奥の方が寒くなった。それに渉と章子は兄妹にまちがえられるほど似た容貌ではない。むしろ対照的と言っても良いくらいで、渉はどちらかというと彫りが深く、目や口も大きい方だが章子は、渉が卵にチョンチョンを書いてからかうくらい小づくりな丸顔だ。いったいどこが似ているのだろうかと思はれ、花屋の小母さんが何か異質なものを嗅ぎわかる不思議な能力を持ってでもいるような気がしてくるのだった。

章子は渉が憮然としているのを見てまた笑い、浪人生なんかにはまちがえられないようにわたしがあなたに生活能力をつけてあげる、と言った。渉はその時、章子の目のすみだけが笑わずに光ったのを見たように思った。

翌朝、渉が目を醒ますと章子は出勤したあとだった。枕元を見て、思わず渉は苦笑した。その日の買い物のメモと、クックブックと、掃除機が並べてあった。

しかし、章子がこんなことでもしてくれなかったら、渉はおそらく自分に料理の才能があることを知らずに一生を過ごしてしまっただろう。クックブックを見ながらの料理は化学の

実験に似ていてなかなか楽しく、作ったものを章子にはめられると渉は自分でも驚いたことに、喜びとやりがいをおおいに感じた。

こうして、渉の毎日には単純なリズムができた。朝ひとつばしりジョギングにでかけ——例の小母さんのいる花屋の前は通らないように気をつけていた——、戻ってから朝食を作って章子を起こす。七時三十分びつたりに章子を送り出したあとカーテンを開け放ってしばらく机に向かう。天気が好い日には、そうじと洗濯をすませてしまう。夕方には買い物に行き、章子の帰りを待ちながら夕食の準備をする。

数年が静かにたったが、渉の中のコップはまだいっぱいになってはいない。渉はそれを待つことにすっかり慣れた。確かに時々、立ちどまって、これで良いのかと、何かの声に耳を澄ましたくなることもあった。ある日、ジョギングの途中に公園でひとりの男をみかけた時、その思いは数週間にわたって渉の心を重くした。

男は三十代のはじめぐらいの年齢好だったが、ひどく片方の脚をひきずり、それと同じ側の腕にも力がいらないように、良い方の手を奥さんらしい人にひいてもらっていた。思ひもかけぬ不幸な事故か病気で体の自由を失ない、リハビリテーションを兼ねて人の少ない早朝、散歩に出たといったふうだった。精神にも障害があるのだろうことは、そのどこからつろな表情から見てとれた。うつろなばかりではない。全体にちぐはぐな感じが漂っているのだ。きちんと体に合った大きさのシャツとズボンを着ているのに、男の体は魂ごと、そこ

から脱け出したがつてでもいるみたいで、馴染んだ感じがまるでなかった。特に衿首のあたりがそうで、首が長く細くつきだして見えた。その肌には透明感があり、短く刈りこんだ頭へつながるうなじが少年のように弱々しかった。

幸福そうな夫婦だった。どこちなく歩く夫を助けながら、奥さんは実に満足げに見える。

男の衣服の違和感と、一種のあやうい均衡が保たれた夫婦仲の良さに、渉はなにかおそろしいものを見せられた気がした。家へ帰っても男のなまじろいうなじがしきりに思い出された。布団をかたづけたあとの畳にごろりとあおむけになって夫婦の印象を反芻していると、どうやら自分がそれをひとごとのように思っていないからおそろしく感じているのだという事実が気がついて愕然となった。思わず自分の首筋をおさえてしまった。自分では見ることのできないその部分が、あの男のものに酷似しているのではないかという想像は渉を戦慄させた。あいつは変わった奴だぜ、と言う声と、来春はがんばるのよ、と言う声が内耳の奥深くで甞しているように感じた。自分をとりかこむもの全てへの漠とした不安に、渉は目をつぶり、畳の上で身をよじって耐えようとした。

数日は外へ出る気にもなれずに、章子を心配させた。けれど渉はまたいつのまにか、いつもの自分に戻っていることに気がつくのだ。結局、自分は、自分に最も向いた生活をしているのだと思うことで、彼はそれなりのあきらめと満足を見出した。

満たされるのを待っているコップをかかえたまま、静かに日々が過ぎてゆく。その事件が

起こらなかつたら、渉にとって二十代後半は平穩な徒弟時代アフレンティスシップそのものだっただろう。

夏の終わりに、章子が近所の公園のくらがりくらがりで暴漢に襲われた。

渉にはその知らせにやってきた警察官が、突如口をきき始めた熊に見えた。今聞いている章子という名前、暴行という言葉、それは自分の知っている言語とは違う熊語レベルの単語なのだと思いこもうとしてはっと気が付くと、両手を赤んぼうのようにかたく握りしめて、自分でも信じられぬほど甲高い裏声で首を左右にふりながら、ソレ、ショウコチガウ、ボクラソレチガウ、ナイナイナイ、と一心不乱に唱えていた。どうかひとつ御主人おちついて、と熊に肩を抱かれてはじめて、渉は、自分が婦女暴行事件の被害者の夫であるという事実を、事実として感じなければいけないことに気がついたのだ。どすんとおとし穴に落とされた気分だった。地上マイナス何メートルかの視点から目をしばたいてあおぎ見ると、たった今までいたはずの日常生活の場はあかるく遠く、その音すらもとどかない。

警察官に連れられて行った派出所の隅に、章子はぼつんとすわらされていた。渉をみつけて章子の目にすがりつく色がうかび、下唇が泣き出す寸前のかたちにゆがんだ。一瞬、渉は醜いものを見た気がして目をそらしかけた。それを我慢するのに意外な努力が要った。渉は自分の頬がこわばっているなと思いながら章子の目に自分の目をすえて、よごれた顔をなで手を握ってやった。章子の細い指が夢中になって握りかえしてくるのを感じてようやく、い